

神の時を信じて

創世記 41 章 37 節～45 節

2025 年 11 月 16 日

松田 基子師

人生とは誰も自分の思うように、願うようには生きられないものです。そんな人生、神様を信じたら何もかも自分の願ったように生きられるのでしょうか。そんな言葉で人々を勧誘する宗教もあります。

しかしキリスト者は、罪と悪の闊歩する世の中を生きて行く中で、神様に従って生きようとすれば、世の中に同調できない時、敵意を買ったり、理不尽な目に遭ったりします。そんな時、神様の助けを必死に祈り求めるのですが、助けはなかなか来ないということを経験します。そこに神様は本当におられるのだろうか、神様がられるのならなぜ助けて下さらないのだろうか、なぜ悪を罰して下さらないのだろうか、との疑問が湧いてきます。

そのことについて、ある時読んだ一文に「多くの人は神様に対して、なぜ悪人を滅ぼしてしまわれないのか、と言うけれども、神様が悪人を滅ぼしてしまわれるなら、人間は全て罪を持っているのだから、全人類を滅ぼさなければならない」という内容が書かれていました。つまり、そう言っているあなたも罪人であり、滅ぼされても良いのですか、と言うことです。それよりも、罪の現実の中で、神様を信じていかに生きて行くかが問題です。

そのことについて思い出したことは、神様は時速 5 キロの神であるという言葉です。神様は、人間の歩みに合わせて世界を導き支え続けて下さっているという意味です。

なぜ神様は、人間の歩みに合わせて世界を導い

ておられるのでしょうか。それは人間を愛し、尊んでおられるからです。「エッ、ホントに？」と聞き返したくなるでしょう。

それは神様が人間を創造された最初にあります。神様は人間を創造されるに当っては、御自身に似た者とする程に尊び、愛する存在とされました。

その根本は愛の自発性です。人間が自発的に神様を愛し、聞き従う力を持つことです。そのために必要なものが自由意志です。しかし、この自由意志、間違っただけで使えば罪と悪が蔓延し、大変なことになるのです。しかし、神様は人を尊び愛する故に、人間に自由意志を与えられました。神様は人をそれほど愛し、信頼しておられたのです。

しかし、人は神に背かせる誘惑者に従い、神様に背く者、神様を疑う者、罪の誘惑に陥る者となっていました。世界は罪と悪の蔓延するところとなりました。

神様はどうなさったのでしょうか。立ち上がって、神様に敵対する者を一掃されたのでしょうか。

神様は自由意志を与えた人間を、尚も信頼されたのです。神様に聞き従おうとする人々に期待されました。神様は、御自身を求める人々が、御心を選び取って行くことによって、世界を導かれるのです。

それが時速 5 キロの神様です。時速 5 キロとは、人間の歩く速さです。人間に寄り添い、共に歩んで、ご自身の計画へと導いて行かれる方法です。

悪の渦巻く世界においては、神様の一つの目標に達するまでには、罪ある人間世界の様々な障害を乗り越えて行かなければなりません。

そこで神さまは御心に従う者に、折に会う助けを与えて目的を達成していかれます。そこには、信仰者の神様に対する絶対的な信頼と、神様は必ず成し遂げて下さるという信仰が必要です。今朝は、その信仰に生きたヨセフの人生を見て参りましょう。

さて、父ヤコブのヨセフへの偏愛が原因で、兄たちはヨセフを憎みました。彼らは父の家から遠く離れた遊牧の地で、自分たちの安否を確認に来たヨセフを捕え、エジプトへ行く商人に彼を売り渡しました。兄たちはヨセフから、親も自分たちもヨセフにひれ伏す事になる、という夢を見たことを聞かされて、いっそう憎しみを増していました。兄たちはヨセフに殺意まで抱き、夢の実現を阻むために彼を売ったのです。

果たして神様の御計画は人間の力によって阻むことが出来るのでしょうか。

17歳のヨセフはエジプトに連れて行かれ、奴隷として売られました。彼を買った主人は、エジプト王の宮廷、王家の侍従長ポティファルでした。39章2節から見ますと

「主がヨセフと共におられたので、彼はうまく事を運んだ。彼はエジプト人の主人の家にいた。3) 主が共におられ、主が彼のすることをすべてうまく計られるのを見た主人は、4) ヨセフに目をかけて身近に仕えさせ、家の管理をゆだね、財産をすべて彼の手に任せた」とあります。ヨセフは日の目を見ることになりました。

ところでヨセフは父ヤコブに偏愛され、兄たちからは憎しみを買いましたが、いつも父の側に居たことによって、ヤコブの神様への信仰を受け継いでいました。ヤコブはヨセフに、神様がいかに自分と共にいて、孤独な時に励まし、ラバンの偽り、策略さえも、それを益に変えて下さったこと、ヤボクの渡しでの、神様にしがみついて祝福を受けたことなど、神様は信じ従う者を守り、祝し用いてくださることを語ったに違いありません。

ヨセフは神様が父ヤコブを導かれたように、自分も神様に守られ、導かれることを確信しました。彼は誠実に働き、訓練され、28歳になりました。

順調に栄えていくヨセフでしたが、そこに神の祝福を阻む人物が現れました。ヨセフは顔も美し

く、体つきも優れていたとあります。若々しく人目をひく美男子であったのでしょう。ポティファルの妻に言い寄られてしまいました。その時、ヨセフははっきりと「わたしは、どうしてそのような大きな悪を働いて、神に罪を犯すことができません」と言って退けましたが、自分の服を彼女の手に残したまま逃げ出したため、彼女はヨセフの服を証拠にして夫に訴え、ポティファルはヨセフを管理下にあった王の牢屋に入れました。

奴隷のヨセフに弁明などできません。忍耐するしかありませんでした。でもヨセフはそこで絶望しませんでした。彼の慰めと希望は「神様は全てを見ておられる、知っておられる、神様は味方してください」との確信でした。ヨセフが投獄されようとも、神様は共におられます。牢獄にあって39章21節から記されていますように

「主がヨセフと共におられ、恵を施し、監守長の目にかなうように導かれたので22) 監守長は監獄にいる囚人を皆、ヨセフの手にゆだね、獄中の人のすることはすべてヨセフが取りしきるようになった」のでした。

牢獄におけるヨセフの忠実な働きは、ポティファルにも聞こえたに違いありません。しかし、妻の手前、ヨセフを牢獄から出すことはしませんでした。ヨセフは自分の一番の理解者と思っていたポティファルも、結局当てにならないことを知りました。彼は、人は当てにならないことを経験し、神様以外に真に頼ることが出来るお方はいないことを実感しました。彼はただ神様を見上げて、神様に対して忠実であらうとしました。

そんな時、王の給仕役の長と料理役の長が王に過ちを犯して、牢に入れられて来ました。侍従長は二人をヨセフに預けて、身の世話をさせたとあります。ポティファルはヨセフの潔白をすでに分かっていた表れです。

幾日経って、2人は夢を見ました。2人の悩み

を察したヨセフは夢を解いてやりました。給仕役の長に3日目に元の職務に復帰できることを告げ、料理役の長には3日目に木にかけられることを告げました。ヨセフはこの時、給仕役の長に「**あなたが元の職務に復帰されたなら、どうかわたしのことをファラオ（エジプト王の称号）に話してこの家から出られるように取り計らってください**」と頼みました。二人はヨセフの解き明かしの通りになりました。

ヨセフは給仕役の長との関わりに、神様の導きを感じたでしょう。「**自分はここからもうすぐ出られる**」その期待で今日か明日かと待ちました。しかし、1月が経っても何の変化もありませんでした。

でも彼は諦めたわけではありません。神様は必ずここから助け出して下さると信じていました。ヨセフは自分に与えられた夢は、必ず実現すると信じていました。「**神様の時は必ず来る。神様は背後にあって、事を進めておられることを信じて待つのだ**」と自分に言い聞かせて、日常を怠ることなく忠実に仕えました。

2年が過ぎて、神様の時は突然やって来ました。神様はエジプト王を動かされました。王は夢を見ました。その夢は王がナイル川に立っていると、つややかなよく肥えた7頭の雌牛が表れ、葦辺で草を食べ始めました。するとそこへ、醜い痩せ細った7頭の雌牛が来て、よく肥えた7頭の雌牛を全て食べ尽くしました。ファラオはそこで目が覚めました。再び眠ると、また夢を見ました。今度は太ってよく実った7つの穂が一本の茎から出て来ました。その後から実の入っていない東風で干からびた7つの穂が生えてきて、先の、太って実の入った7つの穂を呑み込んでしまったのです。ファラオはそこで目が覚めました。

ファラオはこの夢に心が騒ぎ、エジプト中の魔術師と賢者を全て呼び集めさせ、夢の解き明かし

を命じました。しかし、誰一人として王の夢を解き明かせる者はいませんでした。

その時です。例の給仕役の長は、重大な事を思い出しました。神様が彼の心を刺されたのです。2年前、自分の夢を解き明かしてくれたヨセフのことです。出獄当時は王にヨセフのことをいつ言おうかと思っていたでしょう。でも時間と共に忘れてしまっていたのです。

給仕役の長は、直ぐにファラオに申し出ました。**「2年前、王の怒りを買って侍従長の家の牢に投獄された時、一緒に投獄された料理役の長とわたしは夢を見ました。思い悩んでいると、わたしたちの世話をしていたヘブライ人の若者が私たちの夢を解き明かしてくれました。わたしたちは彼の夢の解き明かしの通り、3日目にわたしは元の職務に復帰し、料理役の長は木にかけられました。あの若者は夢を解くことができます**」と言ったのです。

ファラオは、すぐにヨセフを呼ぶよう命じました。神様の御計画は人の思いの及ばないものです。ヨセフ自身、思いもよらない事が起こりました。ヨセフは牢から連れ出され、正装させられるとファラオの前に立ちました。

ファラオはヨセフに「**わたしは夢を見たのだが、それを解き明かす者が居ない。聞くところによれば、お前は夢の話聞いて解き明かすことができるそうだが**」と言いました。

するとヨセフは「**わたしではありません。神がファラオの幸いについて告げられるのです**」とはっきりと答えました。自己の栄達を求める者なら、神様に栄光を帰することはしません。ヨセフは神様のみを崇めています。

ファラオは自分が見た夢をヨセフに語りました。その解き明かしが、エジプトの知者に分らなかったのは当然です。神様がこれから行われることで、人間は知りえないことでした。ヨセフはファ

ラオに対して、その夢を解き明かしました。

「つややかなよく肥えた 7 頭の雌牛、良く実った 7 つの穂、それはこれから 7 年の豊作が続くことであり、痩せた醜い 7 頭の雌牛と東風で干からびた 7 つの穂は 7 年の飢饉のことです。その飢饉は国を滅ぼしてしまう程のものです。ですから、ファラオは、今すぐ聡明で知恵ある人物を見出して国を治めさせ、国中に監督官を立てて、豊作の 7 年の間に国の産物の 1/5 を徴収し、豊作の間に食糧を出来る限り集めて町々に保管させるのです。そうすれば、襲ってくる 7 年の飢饉によって国が滅びることはないでしょう」と進言しました。

ファラオと家来たちは皆、ヨセフの言葉に感心しました。ファラオは見るべきものを見ていました。そして家来たちに「このように神の霊が宿っている人はほかにあるだろうか。神がそういうことをみな示されたからには、お前ほど聡明で知恵のある者は、ほかにいないであろう。お前をわが宮廷の責任者とする。わが国民は皆、お前の命に従うであろう。ただ王位にあるということだけで、わたしはお前の上に立つ」と宣言しました。ヨセフは自分自身、思ってもみなかった神様の御計画に、ただただひれ伏すばかりでした。

この後、ヨセフがエジプトの最高位に就くことで、やがて親、兄弟たちがヨセフにひれ伏す日が来るのです。

ヨセフは兄たちの悪意によって売られ、エジプトに連れてこられ、奴隷とされた上に、主人の妻による逆恨みで投獄されるというどん底に突き落とされました。給仕役の長の夢解きで出獄を期待したのですが、2 年もの間、放置されました。人間的には神様の働きを見出すことはできませんでした。しかし、時速 5 キロの神様は、あれもこれも一切を人間の歩みに合わせて、人間の悪意をも用いて、一步一步御計画の道へと導き、道を開いて実現に向かわせておられたのです。ヘブライ人へ

の手紙 10 章 35、 36 節に

「自分の確信を捨ててはいけません。この確信には大きな報いがあります。36) 神の御心を行って約束されたものを受けるためには、忍耐が必要なのです」とある通りです。ヨセフは、全ては神様の御手の中にあって導かれてきた事を知りました。

私たちも、人生の道が暗くなった時も、神様は時速 5 キロの神として、人間に寄り添い、この社会の中に働きかけておられること、そして自分と共に居て下さることを信じましょう。現実の社会には尚、様々な悪や罪、苦しみや困難はあるのですが、神様は御自身を信じる者、従う者から目を離さず、罪と悪の世界の中を、共に居て、乗り越えさせて下さるのです。

イエス様もヨハネによる福音書 16 章 33 節にある通り

「あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている」と言って力付け、共に居て下さいます。

私たちの人生は神様に従って生きるためにあります。どんな時も道は開かれると、神の時を信じて、地上の旅路を歩み抜いて参りましょう。

お祈りを致します。

愛と憐れみをお与え下さる天の父なる神様。罪多く悪の絶えないこの世界を、お見捨てになることなく、時速 5 キロの神として全ての人に寄り添い、世界を導いて下さっていることを感謝します。私たちはその神様の御心に従い、どのような時も神様の守りと助けを信じて。地上の旅路を生き抜く者としてください。

救い主イエス・キリスト御名を通してお祈りいたします。 アーメン。